高齢者との交流に必要なソーシャルスキル：研究課題の展望

下村文子・吉田　薫・横山奈緒枝・細川つや子・田中共子

高齢化社会に向け、高齢者を取り巻く様々な問題が議論されるようになってきたが、本稿では、高齢者の対人関係のあり方について、社会心理学的見地からアプローチする。高齢者の世帯構成の変化をみると、三世代同居世帯が減少し、高齢者世帯や独居の世帯が増加する傾向にあり（河合・下仲，1990）、男女ともに老年前期から地域における対人関係は乏しくなる傾向があり、老年後期にいたってはその対人関係は家族内に限定されがちであるという（下仲，1997）。このような老年期における対人関係の縮小傾向の中で、異世代間の交流も減少していることが予想される。藤田（1994）によれば、縦の世代間交流は比較的無意味なものとして捉えられつつあり、現在の高齢者は若者世代との交流が少なく、対人関係が同世代に限定されやすい傾向にあるという。しかし、高齢化社会において、高齢者と若年世代の交流が乏しいことは決して良いこととはいえまい。高齢者世代と若者世代の良好な対人関係を形成、維持していく方法の一つとして、「ソーシャルスキル」という概念を用いて、異世代間の交流を活性化する方法について展望してみたい。

1．ソーシャルスキルについて

(1)　定義と研究対象

ソーシャルスキルは、心理学の領域において「対人関係を円滑にするための技能」として注目されてきた。相川（2000）は、従来のソーシャルスキルの捉え方には、「行動的側面を強調している定義」と「能力的側面を強調している定義」があるが、両者は相互に関連しているとして、「相手の反応の解読」、「対人目標と対人反応の決定」、「感情の統制」、「対人反応の実行」というソーシャルスキルが生起するまでの「全過程」を「ソーシャルスキル」とみなし、広義の定義を提案している。

また、より直接的にソーシャルスキルの認知、行動的内容をあげて、ソーシャルスキルという概念を明確化しようとした試みもある。Goldsteinら（1986）は、対人行動の中で社会的適応性を導くのに必要なソーシャルスキルをリストアップしている。それを基に、菊池・堀毛（1994）は「社会的スキル100項目」を作成し、10種類のソーシャルスキルとその下位項目をまとめている。「聞く」・「会話を始める」などの『基本となるスキル』から始まり、『感情処理のスキル』『攻撃に代わるスキル』『ストレスを処理するスキル』『計画のスキル』『援助のスキル』『異性とつきあうスキル』『年上・年下とつきあうスキル』『集団行動のスキル』『異文化接触スキル』と多岐にわたり、具体的行動を包括的にもりこんだ一般性の高いリストになっている。それまでの我が国では、このような基

本的スキルのリストが作成されていなかったという点で、このリストは非常に意義があるものと考えられる。また、菊池(1988)は、リストという形でソーシャルスキルを呈示しているが、ソーシャルスキルはある状況に適した行動であるとも述べている。自分が置かれる状況やコミュニケーションの相手に応じた行動変化の柔軟性がその実施には必要であると指摘しており、決してソーシャルスキルを固定的に捉えているわけではない。

総じて、ソーシャルスキルは基本的に学習可能な行動として、外見的に明らかな行動、およびそれと関連する認知を中心に捉えられており、「ソーシャルスキル・トレーニング(以下SST)」を通じて、適切な行動レパートリーの獲得が可能になるという現実的、応用的な側面を持っている。適切なスキルを積極的に学習するか、もしくは、適切なスキルを効果的に表出する方法を学習することによって、適切なスキルの使用が可能になり、不安が減少し、適応した態度や行動が取れるようになるという(坂野，1990)。子ども対象のソーシャルスキル教育は、子どもの現在の適応状態を改善するだけでなく、将来発生するかもしれない問題への予防的効果も持つとされている(相川,1999)。学校生活でコミュニケーションをうまくとることができれば、孤立やそれに伴う不適応感を防ぐことができ、成人期に遭遇する様々な対人関係上の問題に対しても、柔軟な対処が可能になるというのである。獲得したソーシャルスキルは、その場の状況への適用が可能であるだけでなく、長期間に渡ってその人の対人関係の形成や維持に効果を持つと期待される。

また、ソーシャルスキルとストレスとの関連も指摘されており、ソーシャルスキルの不足は対人領域のストレッサーをより多く受ける結果を招き、うつ病発症を促進する可能性もあるという(田中・相川・小杉，2002；Segrin&Abramson，1994)。他者との対人関係において、適切なソーシャルスキルをいかに効果的に活用できるかという問題は、心身の健康を考える上でも無視できないことである。

これまでの研究においては、ある問題を抱えているためにソーシャルスキルが欠損した人々を対象にした教育訓練的な試みが盛んに発表されている。例えば、自閉症の子どもを対象に電車とバスを利用する移動スキルの習得を試みたものや(渡部，2002)、学習障害児を対象に攻撃的行動や引っ込み思案的行動という不適切な行動の改善を試みたもの(佐藤，2003)、非行少年を対象に親和動機との関連から更生のための指導方法を検討したもの(磯野・堀江・前田，2004)などがある。いずれも、対人場面における適切な行動の習得と、それによって導かれる社会適応を目指すものであり、このような特別な問題を抱える対象にSSTを適用した研究は積極的に行われている。

コミュニケーション上の立場や関係性に注目した研究もある。千葉・相川(2004)は、看護者や看護学生を対象に調査を行い、看護場面における治療的コミュニケーションと対人技能としての「看護における社会的スキル尺度」を作成している。看護者と患者は、いわば援助- 非援助関係であり、日常的な対人関係とは異なる非日常的な対人関係である。秋山(2002)によれば、臨床場面のコミュニケーションは、患者の葛藤や悩み、その他様々な適応上の問題によって成立しているという。つ

まり、援助の対象である患者の立場に合わせたコミュニケーションが求められており、援助者として患者にうまく対処するためのソーシャルスキルが重要になってくる場面と考えられる。岡堂(1997)も、患者とのコミュニケーションの崩壊を導く看護者側の要因をまとめ、看護者側のコミュニケーションのとり方の重要性を強調している。また、非言語コミュニケーションの役割が大きいことも指摘している。看護は、相手が言語で意志伝達しなくとも、相手の身振り、表情、しぐさといった非言語情報を的確に察知して応対できることが求められている仕事であり(坂口，1990)、患者の感情状態などを読み取り、不安を軽減するような働きかけが必要となるのである。したがって、ソーシャルスキルという形に上手な対人行動を技術化し、習得可能なものとして捉えることの応用的意義は大きい。

異文化適応の問題にソーシャルスキルを適用した研究も行われている。田中・藤原(1992)は、在日留学生が日本人との対人関係を形成する上での困難を特定することにより、滞在国での適応促進につながると思われるソーシャルスキルを検討した。留学生の出身国と異なる日本特有のコミュニケーションや行動傾向、対人関係のあり方といった適応上の困難と照らし合わせ、留学生対象のSST実施のための計画モデルを提案している。異文化において社会生活をするにあたっては、そこでの対人関係をこなし、そこの社会のルールにあわせた行動をとることが要求される場面に出会う(田中，1990)。この意味では、その国々特有の文化の違いを受け入れ、円滑な対人関係を形成、維持していくために必要と思われるソーシャルスキルを獲得することは、異文化適応にとって有効な手段と考えられる。立場や関係性、もしくは所属文化の違いという異質性を持った者同士のコミュニケーションは、決して煩雑なだけの無意味なものではなく、互いの異質性から新しく得られるものがあるという点で価値がある。

このように考えると、高齢者世代と若者世代のコミュニケーションは、世代の異質性を理由に敬遠されるべきではなく、むしろ何らかの付加価値を見出すという利点が期待できることに注目していくべきであろう。そのための現実的方法として、ソーシャルスキルの特定と学習プログラムへの心理教育的応用が可能になれば、高齢化社会における共生実現を導く貴重な知識として期待できよう。

(2) 学習セッションへの応用

積極的に望ましいスキルを身につけるという視点は、行動変容による症状の改善を目的とする行動療法の考え方と結びつき(田中ら，1992)、慢性精神障害者を対象にした精神科治療をはじめ、その他様々な対象に向けてソーシャルスキルの学習プランが導入されている。SSTにおいて目標とされるのは、有意義で好意的な対人関係を築くための行動、たとえば、挨拶・謝罪・感謝・主張・誘い・断り・依頼・抗議・討論・社会的会話の仕方など(田中，2001)の行動レパートリーの獲得である。

坂野(1990)は、認知行動療法におけるSSTの具体的方法を５つの要素から説明している。まず「教示」の段階では、トレーニングの実施が必要な理由とその具体的仕組み、トレーニングによって得られる効果について患者に説明する。次に、患者はある対人場面を想定し、どのように行動するかを演じる「ロールプレイ」を行い、不適切な行動を改善するためにロールプレイの評価を「フィードバック」してもらったり、良い点を強調的して評価する「社会的強化」を与えたりする。そして、同じ対人場面で適切な行動とはどのようなものかをモデルが演じ、患者がその様子を観察する「モデリング」が行われる。「教示」を除く要素は、患者がソーシャルスキルを獲得できるまで何度も繰り返し行われ、最終的には、「現実場面での遂行(般化訓練)」として、日常場面での応用が試みられる。伊藤(1997)によれば、SSTは「認知技能」と「行動技能」の２つのプロセスから成り立っており、それぞれが訓練の対象となる。

実際にこのSSTを適用し、効果を検討した研究は数多い。患者に限らず、より一般的な対象者、例えば、内気な人の主張的スキル獲得を目指すもの(van der Molen, 1990)や孤立感の高い人の対話スキル獲得を目指すもの(McWhiter, 1990)などがある。

また、SSTを行う形態には、トレーナーとトレーニーの一対一の場合と、小集団を対象にするものがある。石川・小林(1998)は、小学生の小集団を対象にSSTを行ったところ、大半の児童にソーシャルスキルの向上がみられたが、一部の児童には効果がみられなかった。小集団を対象に行うSSTは必ずしも全員に望ましい効果を得られるとは限らず、個別性に応じたSSTプログラム作成の必要性も指摘されるところである。しかし基本的には、いずれの形態で行われたSSTについても、その効果としてソーシャルスキルの獲得が期待できることが示されている。

２．高齢者とのコミュニケーションや対人関係の資料から示唆されるソーシャルスキル

富永(2000)によれば、高齢期は心身の健康や経済的基盤、社会的つながり、生きる目的の喪失感を体験する時期であり、社会活動や社会参加などの生きがいを通じた対人関係の維持が心身の健康にとって重要であるという。しかし、高齢者は老いに伴って様々な身体能力の低下を経験し、それをきっかけにして他者とのコミュニケーションが困難になる場合がある。特に、60歳を過ぎると、高音域の著しい聴力低下だけでなく、低音域の聴力低下がみられるようになる。このような老人性難聴は、生理的側面からだけでなく、心理的側面からも高齢者のコミュニケーションに影響を及ぼし、言語コミュニケーションに対する意欲だけでなく社会参加への意欲も低下させてしまうという(土田, 2001)。聴力低下がみられる高齢者とうまくコミュニケーションをとる対処法として、「出来るだけ忍耐強く理解するように努める」「ゆっくり、はっきりと話す」などがあげられているが(土田, 2001；Selby & Griffith, 1986)、コミュニケーションの困難さから、頑固や非協力的という誤解を招く可能性があることも指摘されている(矢部・七田・巻田・籏野, 1991)。社会との接点を失うことなく、他者との対人関係を維持することは、高齢者の良好な健康状態を維持するという点で不可欠であるが、他者との

コミュニケーションの成立が徐々に困難になっていくというハンディは避けられない。

上記では、聴力の低下を例にしたが、加齢ゆえの変化は心身の多様な面にわたるものであり、尚且つ高齢者とより若年の者とでは世代差という文化的異質性も抱えている。我々が高齢者とコミュニケーションをうまくとるには、どうしたらよいのであろうか。どのようなことに気を配り、工夫すればよいのかを知ることには少なからず意味があろう。そこで、高齢者とコミュニケーションをとり、対人関係を築いていくときに必要なソーシャルスキルについて何らかの示唆が得られそうな文献を集め、整理してみた(表１)。ただし、専門用語としての「ソーシャルスキル」を用いたものはほとんど見つからず、コミュニケーションの技術や対人関係上のコツのような概念でまとめられたものが多かった。松田(2004)のみが「ソーシャルスキル」という用語を用いているが、その内容の大半は介護上の技術を指しており、いわゆる対人行動における「ソーシャルスキル」とは範囲が異なるように思われる。本稿では、これらの情報からスキルとして読み取れそうな認知と行動を取り出し、内容別にカテゴリーに整理し、スキルとして表1の右欄にあげた。これらの文献内で扱われる対人関係上の技術やコツをカテゴリー化し提示することは、どのような種類、あるいは内容のものが重要視されてきたかという従来の傾向を確認する上で役立つであろう。そして、それぞれの指摘がどのような高齢者を対象としたものかという情報を添え、文献の種類に関しても付記した。これらの資料から示唆されたスキルを全体としてまとめた上で、スキルとしてみた場合に何が取り上げられ、何が不足しているかを指摘し、高齢者との交流に必要なソーシャルスキルに関する研究を学術的に展開していく上での課題を本稿において明らかにしたい。

表１　高齢者との交流に必要なソーシャルスキルに関連する文献一覧

	文献名（著者名,出版年）	文献の種類	対象	カテゴリー	ソーシャルスキルに該当する指摘
①	「老人心理へのアプローチ」（長谷川ら，1975）	参考書	理解力・判断力・聴力の低下、言語障害がある要介護の高齢者	補償系スキル	「話し方（近距離で、ゆっくりと、適当な音量で、ことばじりをはっきりと発音）」、「筆談(字、絵、漫画など)、態度で伝える」、「現物を見せたり、現場まで一緒に歩く」
				症状対応スキル	「理解の程度を確認する」、「中途半端な説明や不明瞭なことばづかいは避ける」
②	「老人がわかる本お年寄りとの上手な付き合い方」(吉沢，1990)	一般書	高齢者一般	症状対応スキル	「言語･聴力障害への配慮(ゆっくりと低音で話す、ゆったりと聞く)」
				建設的スキル	「礼儀正しくわかりやすい言葉を使う」、「優しい口調で話す」、「声をマメにかける」、「名前できちんと呼ぶ」、「傾聴(身を乗り出して熱心に、相手の目を見て、心から聞いている態度を示す、同じ話でも初めて聞くふりをする)」、「相づちをうつ」、「相手の関心事に訴える(関心を示す、考え方に合わす)」、「笑顔」、「あいさつ」、「スキンシップを使う」、「近寄って話す」
				べからずスキル	「傾聴(話の先取りや腰折はしない)」
③	「痴呆性老人の家族介護の発展過程」(諏訪ら，1996)	原著論文	在宅の痴呆性高齢者と家族	補償系スキル	「ノンバーバルサインを手がかりにして察し思いやる」
				症状対応スキル	「痴呆症状を認識する」
				建設的スキル	「高齢者との関係性を認識する」
				べからずスキル	「『怒る』『否定する』などの追及的バーバルコミュニケーションをしない」

④	「成熟と老化の心理学」(生川, 1997)	参考書	視覚障害・聴覚障害・言語障害がある要介護の高齢者	補償系スキル	「はっきりとした言葉で説明しながら援助する」、「話し掛ける時は、手をかけたり、手を握ったりして話す」、「不安を与えることのないように、焦らず、ゆっくりと、はっきりした言葉で話す」、「顔を向けて聞こえる距離で話をする」
				建設的スキル	「本人が話そうとすることにじっくりと耳を傾ける態度を持つ」、「少しでも進歩が見られれば誉めたりして、勇気付ける」、「話題を変える」、「相手の世界に合わせる」
				べからずスキル	「大げさに話したり、叫んだり、顔をしかめたりしない」、「背後から話し掛けたり、座っている相手に立ったまま上のほうから話し掛けたりしないで、目と目の高さを同じにする」、「女性は甲高い声にならないように注意する」、「否定しない」、「叱らない、説得しない」、「むやみに年寄り扱いしない」
				認知的スキル	「様々な問題行動を目の当たりにすると、情けなさや腹立たしさが先に立って、ついしかりたくなるが、戸惑い、迷っている人が目の前にいるという見方をしたい」、「記憶がすっぽりと脱落するなど基本障害は病気のせいと割り切る」
				環境調整スキル	「失敗しないような状況を作る」
⑤	「回想法　グループマニュアル」(黒川ら, 1999)	解説書	医療現場で回想法を適用する高齢者	補償系スキル	「時には話を整理、明確化する」、「ペースを尊重し話してのペースにそう」、「肯定的な側面にさりげなく言及し、話し手の自己評価が高まるように援助する」、「言葉以外のメッセージにも注意を向ける」
				建設的スキル	「無条件に誠実に耳を傾ける」、「言葉の背後に潜む思いを理解するように努める」
				べからずスキル	「話をしたくない人に無理強いをしない」、「指示・命令・お説教をしない」、「批判や誤りを指摘しない」、「誉めすぎない」、「わざとらしく同情を示さない」、「自分の価値観を押し付けない」、「子ども扱いしない」
⑥	「家族介護者の介護上の努力や工夫に関する研究」(野川, 1999)	研究論文	要介護の在宅高齢者	建設的スキル	「接し方(話しかける・話を聞く、やさしくする、逆らわない、普段と同じく接する、ほめる、叱った後は謝る)」、「具体的行動(話し合って理解する、介護者が気分転換する、相手の好みを取り入れる、専門家に相談、人の出入りを多くする、側にいてあげる、スキンシップをする)」、「言葉遣い(穏やかに話す、ユーモアを持って話す)」
				認知的スキル	「介護に対する捉え方(悲観的にならない、病人を思いやる、気長にかまえる、相手を敬う・感謝する、一緒の時を大切にする、無理をしない)」
⑦	「社会福祉援助方法」(白澤ら, 1999)		要介護の高齢者	補償系スキル	「傾聴(話し手の歩調に合わせて話を聴く)」、「こちらの意図が伝わっているか確かめる(話しての言葉をそのまま繰り返す)」
				建設的スキル	「相手のほうに体を向ける」、「うなずき・相づち」
				認知的スキル	「個別化してみる態度」、「人の善し悪しを外見や言動で判断しない」
				環境調整スキル	「話しやすい雰囲気をつくる」、
⑧	「介護専門職のための声かけ応答ハンドブック」(諏訪, 1999)	一般書	痴呆性高齢者	建設的スキル	「ふさわしい話題（季節や気候、日課や行事、生活史）を選ぶ」、「共通点をみつける」、「豊富な知識と経験を認め、興味・関心を示す(昔話を聞く、古い諺を教えてもらう)」、「同じ高さの目線で会話する」、「スキンシップをする」、「悲しみや寂しさを理解・共感する」、「素直に謝る」
⑨	「在宅における痴呆症高齢者に対する介護者の態度とコミュニケーションの実態」（小池, 2000；室伏, 1990）	ルポルタージュ	痴呆性高齢者	補償系スキル	「老人に自分というものを納得させるようにすること(ペースに合わせる、行動をともにする、簡単にパターン化して繰り返し教える、寝込ませない、適切な刺激を少しずつでも絶えず与える)」
				建設的スキル	「老人の言動や心理をよく把握すること(尊重する、理解する、年代を同じにする、説得より納得をはかる、それぞれの反応様式や行動パターンをよく把握し対処する)」、「老人をあたたかくもてなすこと(よい点を見出しよい点で付き合う、生活的・状況的に扱う)」

				べからずスキル	「老人をあたたかくもてなすこと(蔑視・排除・拒否しない、窮地に追い込まない、感情的にならない)」
				環境調整スキル	「老人が生きていけるように不安を解消すること(急激な変化を避ける、頼りの人となる、安心の場を与える、なじみの仲間の集まりを作る、孤独にさせない)」
⑩	「みるよむ 生涯発達心理学—バリアフリー時代の課題と援助—」(塚野, 2000)	概論書	福祉サービス利用者の高齢者と障害者	補償系スキル	「手がかりを提供しつつ会話を続けることで、表現しようという意欲を増大させる」
				建設的スキル	「一度断られてももう一度誘ってみる」、「時間をかけて相手の返事を待つ」、「『○○さん』と名前で呼ぶ」
				べからずスキル	「思い出せないことや忘れていることに、マイナスの評価を与えない」
				認知的スキル	「機能の低下自体を当然のこととして受け止めていく」
⑪	「高齢者とのコミュニケーションスキルに関する基礎的研究」(深澤, 2001)	研究論文	痴呆性高齢者	建設的スキル	「非言語的受容(相づち、繰り返し、感情の反映、感情の明確化、適度な視線、微笑み、タッチング)」、「伝達と誘導(目の前で起こっていることを言葉で伝える、行動を誘導的に指示する、保証する)」、「質問・観察(静観する、既知のことでも快の感情を引き出すために質問する、人生の軌跡・価値観を引き出し共有する)」
				べからずスキル	「質問・観察(答えられなくても深く追求しない)」
⑫	「高齢者を知る辞典 気づいてわかるケアの根拠」(大塚・神定, 2001)	事典	高齢者一般	補償系スキル	「ペースをあわせる」、「繰り返す」
				建設的スキル	「受容的・支持的態度をとる」、「傾聴」
				べからずスキル	「口出しをしない」
⑬	「老年看護学Ⅱ」(奥野ら, 2001)	看護学習書	要介護の高齢者	補償系スキル	「ペースをあわせる（ゆっくり待つ態度)」
				症状対応スキル	「コミュニケーション障害の把握と障害に合わせた伝達方法の工夫」
				建設的スキル	「言葉の背景にある生活史と前後の状況を理解(受容的接し方)」、「言葉かけと傾聴(受容・共感的態度、肯定的なフィードバック)」、「非言語コミュニケーションの活用(目つき、表情、仕草、姿勢、行動、語調に敏感になる、手を握って励ます、肩を抱いていたわる、マッサージをして癒す)」
⑭	「対人援助とコミュニケーション—主体的に学び、感性を磨く—」(諏訪, 2001)	参考書	養護老人ホームの介護サービス利用者	建設的スキル	「利用者本位の言葉（『ゆっくり召し上がってください』『何かご用はないですか』）・心配り・気遣いの言葉（『枕はこれでいいですか』『よく眠れましたか』)、誉め言葉（『とても素敵ですよ』）を使用する」
				べからずスキル	「介護者本位の言葉、介護者の都合を優先する言葉（『早く食べてよ』、『早く脱いでちょうだい』）・指示的・命令的な言葉（『今度はこっちを向くのよ』『おとなしくしててよ』）・否定的な言葉（『匂うわ』『重い』『どっこいしょ』）は使用しない」
⑮	「シリーズ21世紀の社会心理学Ⅰ対人行動の社会心理学」(土田, 2001; Selby & Griffith, 1986)	参考書	聴力低下がみられる高齢者	補償系スキル	「ゆっくりと、はっきりと話す」、「聞きやすい側に向けて話すようにする」、「叫んだり必要以上に声を高めない」、「高齢者の多くは高い音が聞き取りにくくなるので、特に甲高い音にならないように注意する」、「時どき間をおいて、応える時間を充分に与える」
				認知的スキル	「出来るだけ忍耐強く理解するように努める」
				環境調整スキル	「ラジオ、テレビなどバックグラウンドの音を低くする」
⑯	「ホームヘルパーのためのコミュニケーションハンドブック」(是枝, 2002)	解説書	要介護の高齢者	補償系スキル	「利用者のペースに合わせる(焦らず、じっくり構える)」
				建設的スキル	「基本ポイント(利用者を理解する、共感を身につける、感情を知る、沈黙のメッセージをとらえる、自分自身の質を高める)」、「雰囲気、あいさつ、自己紹介(笑顔で利用者の目をみてあいさつする、明るく礼儀正しい態度で信頼関係を作る)」、「話し方、会話の姿勢、言葉づかい(利用者を敬った態度と言葉遣いを心がける、利用者を見下ろさず目で聴く)」、「観察(表情や顔色、態度から利用者の気持ちをつかむ、いつもと違う変化を考える)」、「話の聴き方(言葉ではなく利用者の気持ちを聴く)」、「問いかけ(利用者の気持ちを引き出す、沈黙の意味を知る)」、「促し、あいづち(表情をつけて熱心に聴いている態度

					を示す)」、「感情を確かめる（繰り返しで理解を深める、利用者の気持ちに共感する)」、「自己決定を促す」、「隠れたニーズを知る(報告の中の隠れた要求を知る、利用者の様子を詳しく観察する)」、「あやまる(誠意を込めて素直にあやまる)」、「断る(サービス外の要求ははっきりと断る、贈り物やお茶を出されても断る)」、「支援する(受容、目標を見つけて行動につなげていく手助けをする)」、「守秘義務」
				べからずスキル	「おしつけない(利用者の生活、価値観を大切にする)」、
⑰	「老年期の作業療法」(浅梅ら, 2003)	看護学習書	痴呆性高齢者	建設的スキル	「高齢者の人生の歴史に関心を寄せ、その声に耳を傾ける(話したいという気持ちになってもらう、静かな聞き手となる)」、「安易な『受容』や『共感』は慎む」、「一人ひとりの高齢者に固有の『価値』や『意味』を共に再発見していく(敬意の念を持つ)」
				べからずスキル	「高齢者の心に土足で踏み込まない(問題を指摘しない)」、
⑱	「高齢者介護と心理」(小林, 2003)	解説書	痴呆性高齢者	補償系スキル	「何度も同じことを尋ねてくる場合は、分かっている部分を支持する"そうですよ"という言葉かけや、『こうなりますよ』『こうする人が多いですよ』というような補助的な言葉がけが有効になってくる」
				建設的スキル	「愚痴を嫌がらず、弱音を叱らず、受け流す」、「答えを催促するのではなく、相手の言葉を繰り返す」、「いつのまにか話が変わっても、それを訂正せず、会話を楽しむ」、「要介護者の訴えに耳を傾け、相手が話し易い昔話に興味を示す」、「話を聞きだし、老人の過去をともに生きる」、「相手から明るい前向きの言葉が出た時は、大きくうなずき、励ます」、「『大丈夫ですよ』『怖くないですよ』という安心感を持ってもらう対応をする」、「訂正や叱責を避け、『そんなふうに思うの？』『そう思うと怖いですね』など、本人の捉え方をまず認める」
⑲	「思いやりのひとこと」(米山, 2003)	一般書	要介護の高齢者	補償系スキル	「せかさないで被介護者のペースに合わせる」
				べからずスキル	「指示・指図・命令語を使わない」、「禁止・否定後を使わない」、「指摘・咎め・叱責・詰問用語を使わない」、「あてつけ・嫌味・愚痴を言わない」、「強要(無理強い)・強制的な言葉使いをしない」
⑳	「お年寄りと家族のためのソーシャルスキル」(松田, 2004)	一般書	要介護の在宅高齢者	補償系スキル	「わかりやすく伝える（加齢による知覚の変化を意識、一回の情報量を少なく、繰り返し伝える、大切なことは強調)」、「物忘れに対処する(買い物メモ、選択式のメモ、物の置き場をシンプルに、服薬管理ボックス、タイマーや安全装置)」
				建設的スキル	「話を聞く（相づちをうつ、繰り返す、要約して返す、近づいて聴く、顔を見る、関心を持って聴く、非言語情報の活用、間違いは素直に訂正、落ち着く)」、「質問する（確認は閉じた質問で、再生より再認)」、「良好な人間関係を作る(思い込みは捨てる、大切なことは聴く、敬意、手紙で伝える)」、「穏やかに暮らしてもらうために(不安や混乱に対応する、間違いを訂正しないで本人の現実を受け入れる、忘れることを利用する、安心感を与える、変化に注目する、行動の背景を考える、正常と異常の両心理に注目する)」
				べからずスキル	「話を聞く(急かさない、さえぎらない)」、「質問する(急いで答えを求めない)」、「良好な人間関係を作る(習慣や価値観を否定しない)」
				感情的スキル	「介護ストレスへの対処のコツ（一人で悩まない、一つのやり方にこだわらない、できることとできないことを知る、介護を客観的に見る)」

これらの先行文献の中で対象とされている高齢者の特徴をみると、以下の３つに大きく分類できる。高齢者一般(②吉沢，1990、⑫大塚・神定，2001)を対象にしたもの、要介護高齢者(①長谷川，1975、④生川，1997など)を対象にしたもの、痴呆性高齢者⑧(諏訪，1999、⑨小池，2000など)を対象にしたものである。特に、要介護高齢者と痴呆性高齢者を対象としたものが大半を占めていた。文献の種類をみてみると、解説書や一般書が多く、調査研究を基にしたものは２冊のみと少ない。

また、想定されている対人場面は主に介護場面であり、扱われているソーシャルスキル的なものも、介護上のケアの工夫を指している。要介護高齢者に限らず、一般的高齢者とコミュニケーションをとる上で、どのような技能が必要となるかという問題意識を持って調査した研究は非常に少なく、それを明らかにするための研究が積極的に取り組まれてきたとは言い難い。

そして、ソーシャルスキルの内容に該当すると思われる指摘を整理してみると、その内容からいくつかの種類に分類することができる。まず、「ゆっくりと低音で話す、ゆったりと話す」(②吉沢，1990)や「筆談や態度で伝える」(①長谷川ら，1975)などのように、高齢者の聴力低下や視力低下を補うことでコミュニケーションをとりやすくする、「補償系スキル」とでもいうべきものがある。
また、「わかりやすく伝える」や「物忘れに対処する」(⑳松田，2004)などの高齢者の軽い認知障害に対応する「症状対応スキル」、「促し・あいづち」(⑯是枝，2002)や「相手の関心事に訴える」(②吉沢，1990)、「よい点を見出しよい点で付き合う」(⑨小池，2000)などの高齢者に歩み寄りながら良さを引き出そうとする、「建設的スキル」もあげられる。

「基本障害は病気のせいと割り切る」(④生川，1997)や「個別化してみる態度」(⑦白澤ら，1999)など、高齢者をどのように理解し、どのような態度をとるかという認知的枠組みとしての「認知的スキル」もある。さらに、「一人で悩まない、介護を客観的にみる」(⑳松田，2004)などの無意識に生起しがちなネガティブ感情をいかにコントロールし、抑制するかという「感情的スキル」も含まれる。「失敗しないような状況を作る」(④生川，1997)、「話しやすい雰囲気をつくる」(⑦白澤ら，1999)などの高齢者の置かれる場の設定に注目する「環境調整スキル」もみられた。

また、これらの肯定文によるスキルとは異なり、「大げさに話したり、叫んだり、顔をしかめたりしない」(④生川，1997)や「習慣や価値観を否定しない」(⑳松田，2004)などの「してはいけない」ことを重視する、いわば「べからずスキル」も多くみられる。

総じて、「建設的スキル」が多く見られたが、内容を細かく見ると、「要介護者の訴えに耳を傾け、相手が話し易い昔話に興味を示す」(⑱小林，2003)や「間違いを訂正しないで本人の現実を受け入れる、忘れることを利用する」(⑳松田，2004)などのように介護という行為の特性を生かした対人関係のコツが多くみられる。このことは、要介護高齢者や痴呆性高齢者との対人関係に注目する文献が多いことを背景にしているためと思われる。次に多くみられたのは、「補償系スキル」であった。高齢者の身体的、認知的能力の低下に対する対処としてのソーシャルスキルが関心を集めやすく、問題として重視されやすいものであることがうかがえる。これらを獲得することは、高齢者とコミュニケー

ションをとる上で必要なものとして認識されやすく、同世代とのコミュニケーション場面とは特に異なる特徴といえるであろう。

3．先行研究・資料の対象とした内容とその限定性

高齢者とのコミュニケーションの問題を扱ったこれまでの研究では、前述したように、要介護高齢者や痴呆性高齢者を対象とする介護場面を想定したものが多い。高齢者を介護する時に、どのような技能が必要であるかを検討したものが大半である。これは、高齢者を援助の対象と捉え、保護的立場から接する場合と言い換えてもよいであろう。その場合は、介護者は高い専門性と技術を求められるのである。ところが、高齢者世代のすべての人に介護ニーズがあるとは限らない。現在の社会においては介護問題への関心は高く、社会によって保護されるべき存在としての高齢者像が浸透しつつある。そのため、被援助者としての「虚弱高齢者」が想定されやすいということかもしれない。しかし、現実には高齢者世代といえどもその年齢層は幅広く、健康度もまちまちである。高齢者とのコミュニケーションを考えていくためには、「虚弱高齢者」だけでなく、比較的健康な高齢者との対人関係についても考え、援助関係に偏らない建設的な対人関係も視野に入れていかなければならないのではないだろうか。我々が高齢者とうまくコミュニケーションをとり、良い対人関係を成立させていくには、援助- 被援助に偏りがちな視点を見直し、共に社会を構成する共生の仲間として関係を捉え直す必要があるように思われる。

当然ながら、同世代同士のコミュニケーションとは異なる面もあり、「症状対応スキル」や「補償系スキル」のように、高齢者世代の老いによるハンディを補いながらコミュニケーションをとるという援助的視点も一部は必要となるであろう。しかし、高齢者「全般」を援助の対象とみるのではなく、我々の日常的な対人関係と同様に、対等な立場からのコミュニケーションを進めるためのソーシャルスキルを含めて考えていかなければならないのではないだろうか。

さらに、先行文献で語られるソーシャルスキルは、職業的立場を通じて語られる経験論に基づいたコツが大半であり、学術的な根拠が乏しいことも指摘できよう。より効果的なソーシャルスキル学習を提案するには、その根拠と妥当性だけでなく、SSTへの応用を可能にする学術的な正確さ、緻密さをあわせ持った検討を必要とする。

高齢者世代と若者世代の交流が頻繁であるとはいいがたい現状は、決して望ましいものではない。高齢化が進む中で、世代間の距離がますます広がっていくことが危惧される。このような認識にたてば、高齢化社会に向けて世代間の交流のあり方を見直すことは社会的急務といえる。隔絶した関係性を脱し、身近な隣人としての共生関係を実現するためにも、我々は高齢者とどのようにコミュニケーションをとっていけばよいかという点を、改めて考えていくべきであろう。

4．関係性の成立に関するソーシャルスキルの効果

(1) コミュニケーション・対人関係の困難の背景

ソーシャルスキルが充分に実施されたとしたら、高齢者とより若年世代の関係性成立にどのような効果が予想されるだろうか。以下では、関係性成立の困難さを取り上げた過去の研究例から、スキル実施によっていかにその困難が解消されるかという効果の可能性について示唆を探ってみたい。

高齢者世代と若者世代における対人関係の成立を困難にし、世代間の距離を増している要因として考えられるのは、世代間の異質性、接点の希薄さ、各世代に対する認識不足と、それを背景にした社会的ステレオタイプの存在であるとした以下の指摘がある。藤田(1994)は、世代間のコミュニケーションの特徴として、同世代内は同質性が高く、異世代間には異質性があると述べている。同世代内では、同じ経験や同じ考えを持っているという点でコミュニケーションが容易であるが、異世代間ではその同質性に乏しいため、コミュニケーションも困難であるという。また、時間距離性の観点から、同じ時間軸に属する同世代同士のコミュニケーションのほうが社会的にも受け入れられやすい傾向にあるとも述べている。つまり、異世代は、同じ時間を過ごしていないために、共有する経験や考え方が少ない。そのため、世代間ギャップがコミュニケーションの妨げとなって、接点の乏しさや意思疎通の困難さを生み出している可能性があると考えられる。

若者世代は、高齢者とのコミュニケーションに対して消極的であることも明らかになっており、「話が合わない」、「活動のペースがあわない」、「気を使うのがわずらわしい」などの理由が交流意欲を低くしているという報告がある(総務庁長官官房高齢社会対策室，1999)。若者世代は、高齢者世代に対してコミュニケーション能力が低いというネガティブなステレオタイプを持っていることが示されている。

Ryan，See，Menneer & Trovato(1994)は、若者と高齢者間でコミュニケーション能力の認知を比較し、両世代ともに高齢者のコミュニケーション能力を低く評価する傾向にあることを明らかにした。高齢者のコミュニケーション能力の低さというステレオタイプは、若者世代のみならず、高齢者世代にも根強いことが示された。このようなネガティブなステレオタイプも、若者世代と高齢者世代のコミュニケーションへの動機を低下させ、交流を希薄なものにしている一因となっていると思われる。また、ステレオタイプという認知が、実際にコミュニケーション行動の低下として表面化してしまうという。堀・藤田(1992)は、高齢者に対するコミュニケーションとして「ベイビートーク」が行われていることを確認した。彼らは、幼児への話しかけの口調と似たベイビートークは、高齢者のコミュニケーション能力の低さという社会的ステレオタイプや偏見から生じるものであるとして、エイジズムによって高齢者を一つの社会的カテゴリーに当てはめてしまうことを疑問視している。そのような立場から考えれば、異質性を含む異世代間のコミュニケーションにおいては、社会的ステレオタイプという枠組みを通じて相手を認識するのではなく、実際にはどうであるかという、異質性の本質を把握することが重要となろう。誤解から生じる世代間の距離や接点の希薄さ

は、相手を正しく認識し直すことでより解消される可能性があると考えられる。

(2) 接触の持つ効果

社会心理学の領域では、実際に接触の機会を持つことで異質性の認知や社会的ステレオタイプが低減、解消されるという「接触仮説」に基づいた研究が多く行われてきた。異なる集団の成員同士の接触を通じて、互いの価値や態度の類似性を発見し、ネガティブなステレオタイプの解消と理解をより深めることができるとされる。古典的研究としてよく知られるSherif(1961)のサマーキャンプ実験では、単なる接触ではなく、共通目標を設定した上での接触が二集団間の対立を解消させていくことが示されている。また、「社会的アイデンティティー理論」に基づく研究においては、集団間接触の重要性が取り上げられている。人は他者を「内集団」と「外集団」にカテゴリー化し、自己の所属集団である「内集団」を、「外集団」よりもひいきする傾向にある。そして、「外集団」の成員は「非個人化」され、個人としてよりもむしろ集団全体というステレオタイプ的認識につながりやすくなるという。Brewer&Miller(1984)の「非カテゴリー化のモデル」に従うと、単なる集団同士の接触ではなく、成員の個人単位の接触がステレオタイプ低減に意味を持っている。集団というカテゴリーに基づかない個人単位の接触は、ステレオタイプ的認識の誤りに気付かせ、集団内は必ずしも同質な成員で構成されているのではなく、各成員が個別の特徴をもっていることに気付かせてくれる。

このことから考えると、高齢者世代に対する若者世代の社会的ステレオタイプの解消は、両世代の個人単位の接触によって進む可能性があると考えられる。高齢者と実際に接触する機会を持ち、高齢者という社会的カテゴリーに矛盾した個々の高齢者に関する情報を得ることで、若者世代に浸透している高齢者ステレオタイプの誤りに気付くことが期待できる。しかしながら、接触の機会を単に設定することだけでは充分ではなかろう。異世代間の対人関係を形成し、発展、維持していくには、接触の機会を持った上で、実際にどのように接するべきかという問題も考えなければならない。若者世代が高齢者世代とコミュニケーションを円滑に行うことができるような、ソーシャルスキルの獲得が望まれる。高齢者世代と若者世代という異世代間のコミュニケーションの困難を克服するために、SSTの導入を考えていくことには少なからぬ意味があると思われる。

(3) ソーシャルスキル学習の心理教育としての可能性

高齢者世代と若者世代のコミュニケーションを活発にし、世代間の距離を近づけるためには、SSTを導入し、若者世代のソーシャルスキル学習を進めていくことが有効ではないかと我々は考えるに至った。しかし、現状では、高齢者との対人関係に必要なソーシャルスキルに関する先行研究は、その数的にも内容の質的にも十分とは言いがたい。そこで、SSTの導入を試みるに先立って、実際に高齢者との交流に必要なソーシャルスキルを調べ、応用的発展を可能にするスキルのリスト

を作成する必要がある。

そのためには、高齢者との交流が頻繁にあり、良好な対人関係を築くことに長けている人々を対象とした調査を実施し、現場の声に基づいた現実性と具体性のあるソーシャルスキルを聞き出すという調査方法が考えられる。そのソーシャルスキルのリストを基に、より大規模な質問紙調査を実施し、少数例から抽出したスキルの概念にどれほどの一般性あるのかを確認し、また、リストの適用範囲や実施に関わる変数を把握しておく必要もあるだろう。どのような高齢者とのどのような対人場面を想定するかによって、必要となるソーシャルスキルが異なってくるという社会文化的文脈とスキルの適用との関わりについても、調査を加える必要があろう。文脈によるスキルの選択や効果の違いを判断する能力を身につけることで、より状況に適した効果的なソーシャルスキルの実行が可能になるだろう。

最終的な目標としては、有効性と一般性が実証されたソーシャルスキルのリストを基にしたSSTを実用化することがあげられよう。若年世代に向けたSSTの学習プランを作成し、ソーシャルスキルの獲得を目指した学習セッションを行うことを基本とする。日常場面における高齢者とのコミュニケーションを想定しながら、セッションにおける学習も進め、現実場面での般化を促し、応用能力の獲得を目指すのである。

若者世代がソーシャルスキルを身につけることが出来れば、高齢者とのコミュニケーションの困難はより解消され、世代間の距離は一層縮まることが期待される。そして、高齢者世代は若年世代と交流することによって、心理的な支援、いわゆるソーシャルサポートを得ることができ、心身の健康状態の向上も見込めるかもしれない。また、若者世代にとっても高齢者世代との交流は、同世代からは得ることのできない様々な知識や経験を学ぶ良い機会となるのではないかと考えられる。ソーシャルスキルの獲得と実施は、それまで異質な存在であった相手の本質を見直し、正しく理解するきっかけを与えるであろう。さらに、接触に自信を持つ人が増えれば、実際に接触する機会を増していくことになろうし、現実的な効果が増幅され、関係性の成立をさらに進めていくであろう。高齢者との対人関係に必要なソーシャルスキルに関する研究を進めていくことは、高齢者との共生を目指す現代社会において、価値のある心理的技術を提供できる可能性を持っているといえよう。

参考文献

相川充　1999　ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校 楽しく身につく学究生活の基礎・基本　小林正幸・相川充(編)　図書文化社　12-20

相川充　2000　人づきあいの技術―社会的スキルの心理学―　サイエンス社　12-21　110-136

秋山俊夫　2002　臨床場面におけるコミュニケーション　大島眞・秋山博介(編)　現代のエスプリ コミュニケーション学 現代コミュニティにおけるコンセンサスの可能性　133-140

浅梅奈津美・守口恭子　2003　老年期の作業療法　鎌倉矩子・山根寛・二木淑子(編)　三輪書店

114-123

Brewer,M.B., Miller,N. 1984 Beyond the contact hypothesis : Theoretical perspectives on desegregation In N.Miller & B.Miller (EDs) Groups in Contact : The Psychological of Desegregation New York : Academic Press

堀薫夫・藤田綾子　1992　成人期に予期される年齢規範に関する調査研究：高齢者と学生の年齢規範の比較を通して　社会老年学　36　50-57

藤田綾子　1994　コミュニケーションとこれからの社会　高橋順平・藤田綾子(編)　ナカニシヤ出版　101-112

深澤圭子・藤井瑞恵・戸口愛子・本居聖子　2001　高齢者とのコミュニケーション・スキルに関する基礎的研究―施設入所痴呆高齢者と看護・介護職員との関わりから―　高齢者問題研究　17　107-121

Goldsetin,A.P., Spratkin,R.P., Gershaw,N.J. & Klein 1980 Skill Training Approach to Teaching Prosocial Skills Research Press

長谷川和夫・賀集竹子(編)　1975　老人心理へのアプローチ　医学書院　115-116

石川芳子・小林正幸　1988　小学校における社会的スキル訓練の適用について―小集団による適用効果の検討―　カウンセリング研究　31　3　300-309

磯野美良・堀江健太郎・前田健一　2004　非行少年と一般少年における社会的スキルと親和動機の関係　カウンセリング研究　37　1　15-22

伊藤順一郎　1997　SSTと心理教育　鈴木丈(編)　中央法規　19-35

河合千恵子・下仲順子　1990　老年期における家族―老人とその配偶者、子世代、孫世代の対人関係についての心理学的アプローチ―　社会老年学　31　12-21

菊池章夫・堀毛一也　1994　社会的スキルの心理学 100のリストとその理論　川島書店

菊池章夫　1988　思いやりを科学する　川島書店　187-197

小林敏子　2003　高齢者介護と心理　赤鷲書房　46-49、77-94

小池妙子　2000　在宅における痴呆性高齢者に対する介護者の態度とコミュニケーションの実態　人間関係学研究　創刊号　193-206

小宮英美　1999　痴呆症高齢者ケア　中央公論社

黒川紀子他　1999　回想法 グループマニュアル　ワールドプランニング　10-11

松田修　2004　お年寄りと家族のためのソーシャルスキル　サイエンス社

McWhiter,B.T 1990 Lonliness : A review of current literature, with implications for counseling and research Journal of couselling and development 68　417-422

室伏君士　1990　痴呆の介護はどのようにするか　長谷川和夫(編)　医療ジャーナル社　97-108

野川道子・今野多美子　1999　家族介護者の介護上の努力や工夫に関する研究　高齢者問題研究

No.15　59- 66

岡堂哲雄　1997　現代のエスプリ別冊 看護と介護の人間関係　至文堂　72-73

奥野芝代・大西和子(編)　2001　老年看護学Ⅱ 老年看護の実践　廣川書店　356-358

太田喜久子　1996　痴呆性老人と介護者の相互作用に関する研究　看護研究　29　4　271-276

大塚宣夫・神定守　2001　高齢者を知る辞典 気づいて分かるケアの根拠　介護・医療・予防研究会(編)　厚生科学研究所　238-239

Ryan,E.L., See,S.K., Menneer,W.B. & Trovato,B. 1994 Age-based perception of conversation skills among younger and older adults In M.L.Hummert, J.M.Wiemann, &J.F.Nussbaum (EDs) International communication in older adulthood Newbury Park, CA : Sage 15-39

坂野雄二　1990　Social Skill Trainingの発展と今後の課題　集団精神療法　第6巻2号　97-101

坂口哲司　1990　看護場面の対人関係における非言語コミュニケーションの意義　看護実践研究　2月号　80-83

佐藤容子　2003　仲間から拒否される学習障害児への社会的スキル訓練　行動療法研究　第28巻　第2号　111-121

Segrin,C. & Abramson,L.Y. 1994 Negative Reactions to Depressive Behavior : A Communication Theories Analysis Journal of Abnormal Psychology 103　355-668

Selby.P. & Griffith.A. 1986 A Guide to Successful Aging The International Health Foudation Sherif,M., Harvey,O.J, White,B.J., Hood,W.R., Sherif,C.W. 1961 Intergroup Conflict and Cooperation : The Robbers Cave Experiment Institute of Group Relation the University of Oklahoma

是枝祥子　2002　ホームヘルパー現任研究テキストシリーズ⑤ ホームヘルパーのためのコミュニケーション・ハンドブック 利用者との信頼関係を築くために　20-48

下仲順子　1997　現代心理学シリーズ14　老年心理学　培風館　153

白澤政和・尾崎新・芝野松次郎(編)　1999　社会福祉援助方法　有斐閣　79-86

総務庁長官官房高齢社会対策室　1999　児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査

諏訪さゆり・湯浅美千代・正木治恵・野口美和子　1996　痴呆症老人の家族介護と発展過程　看護研究　29　3　31- 42

諏訪茂樹　1999　介護専門職のための声かけ・応答ハンドブック　中央法規　20-46

諏訪茂樹　2001　対人援助とコミュニケーション―主体的に学び、感性を磨く　中央法規　20-46

田中健吾・相川充・小杉正太郎　2002　ソーシャルスキルが2者間会話場面のストレス反応に与える効果に関する実験的検討：２者間のソーシャルスキルにおける相対的差異の影響　社会心理学研究　第17号第３号　141-149

田中共子　1990　異文化間におけるコミュニケーションの能力と適応―ソーシャル・スキル研究の動向―　広島大学留学生日本語教育　第３号　19-31

田中共子・藤原武弘　1992　在日留学生の対人行動上の困難―異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討―　社会心理学研究　第7巻第2号　92-101

田中共子　2001　総説臨床心理学　小林重雄(編)　コレール社　135-138

千葉京子・相川充　2004　看護における社会的スキル尺度の構成　看護研究　33　53-62

富永大介 2000 思いやりとホスピタリティの心理学 平井誠也(編) 北大路書房　174-175

塚野州一(編)　2000　みるよむ 生涯発達心理学―バリアフリー時代の課題と援助―　212-213

土田昭二(編著)　2001　シリーズ21世紀の社会心理学Ⅰ対人行動の社会心理学　土田昭司(監修)　北大路書房　133-135

生川善雄　1997　成熟と老化の心理学　谷口幸一(編)　192-219

van der Molen,H.T 1990 A definition of shyness and its implications for clinical practice. In W.R.Crozier (ED) Shyness and embarrassment : Perspectives from social psychology. Cam bride University Press. 255-285

矢部弘子・七田恵子・巻田ふき・籏野脩一　1991　地域在住虚弱老人の聴力難聴が日常生活と介護に及ぼす影響　社会老年学　33　81-87

米山淑子　2003　思いやりのひとこと～介護するあなたへ～　一橋出版　12-27

吉沢勲　1990　老人がわかる本 お年寄りとの上手な付き合い方　池田書店　28-34

渡部匡隆　2002　自閉症児への移動スキルの形成と地域の人々のかかわり　行動療法研究　第28巻第2号　83-95